Henry James の“The Real Thing”：主題と「ほんもの」の曖昧性をめぐって

名本　達也

佐賀大学全学教育機構紀要　第10号
Journal of Organization for General Education
Saga University
Volume 10, 2022

Henry James の“The Real Thing”：主題と「ほんもの」の曖昧性をめぐって

名本　達也

Henry James's “The Real Thing”: its theme and ambiguities of “the real thing”

Tatsuya NAMOTO

要　旨

Henry James 中期の短編小説“The Real Thing”は、一般的には「芸術家もの（“artist tales”）」として位置づけられている。そして、これまでの議論の大半は、語り手である挿絵画家が、「ほんもの」であるが故に Monarch 夫妻をモデルとして採用しなかったことの意味、及び、そのような選択をするに至った彼の芸術観を明らかにするために費やされてきたと言ってよいだろう。本論は、“The Real Thing”は、芸術の問題を主題として扱っているのではなく、Monarch 夫妻を通して、凋落してゆくかつての有閑階級の人々の姿を描くことにあったのではないかと指摘するものである。

【キーワード】Henry James、artist tales、

序

Henry　James の芸術家を扱った中短編小説の中で、高い評価を得てきた作品のほとんどは『New York 版（*The Novels and Tales of Henry James*）』の第15巻と第16巻に収録されているが、“The Real Thing”（1892）と“The Liar”（1888）は、それぞれ第18巻と第12巻[1]に収録されている。Powers によれば、その理由は明白であり、後者の２編は、芸術家の心が、芸術の追求と世俗的な成功の間で揺れ動く“art vs the worlds”という主題を扱った作品であるからだという（Powers 360）。つまり、同じ「芸術家もの」であっても、第15巻や第16巻の作品群とは主題が異なるというわけだ。[2]

“art vs the worlds”を主題として扱った代表的な作品としては、“The Real Thing”の他には、“The Story of a Masterpiece”（1868）、“The Lesson of the Master”（1888）、及び“The Liar”（1888）などが挙げられるだろう。ここに挙げた作品のうち、“The Real Thing”以外の作品では、いずれの場合も、そこに登場する芸術家たちは、芸術よりも俗世的成功を優先している。[3] それでは、“The Real Thing”においては、世俗的成功よりも芸術が尊重されているケー

スであるかと言えば、必ずしもそう断言できないところがある。勿論、この点についてはPowersが指摘する通り、この短編小説が『New York版』において、他の「芸術家もの」の作品群とは異なる巻に収録されたことと深く関連しているかもしれない。しかしながら、その一方で、“The Real Thing”に関する従来の批評の流れを概観すると、作品において何が「ほんもの」であるのかということを突き止めることに拘泥し過ぎたために、議論がJamesの主張とは少々かけ離れた方向へ向かってしまっているのではないかと思える節がある。そこで、本稿では、まず、これまでになされてきた「ほんもの」探しの議論の経過を検証し、“The Real Thing”がいわゆる「芸術家もの」の中でどのように位置づけられうるのか、また、Jamesの作品群の中でどのような意味を持つのかについて、一つの解釈を提起してみたい。

I

「序」で言及した“The Liar”の作品解釈をめぐって、この短編小説における「嘘つき」は誰なのかという議論が盛んになったのと同様に、“The Real Thing”についても、何が、或いは、誰が「ほんもの」であるのか、そして、小説家がここで意図している「ほんもの」とは何なのかという論争が巻き起こったのは当然の流れと言えるかもしれない。まず、議論を始める前に確認しておかなければならない点は、通常であれば「にせもの」の対義語として肯定的に捉えられるべき「ほんもの」という言葉が、“The Real Thing”という作品の中では、本来期待される価値を持っていないということだ。最初に、この点を確認しておく必要があるだろう。

まず、簡単に話の筋立てを追いながら、この短編小説がどのように読める物語であるのかを確認しておこう。語り手「私」は、肖像画家を生業とすることを志してはいたが、生計を立てるために、雑誌の挿絵も描いていた。そして、彼のアトリエに、窮乏しているMonarch夫妻が、モデルの仕事を求めてやってくる。挿絵のための紳士と貴婦人を描くモデルとして、夫妻はまさに「ほんもの」だったが、画家はロンドンの下町娘（“a freckled cockney”）であるMiss Churmを好んで起用してきていた。その理由は以下の通りである。

> I like them [the Monarchs] —I felt quite as their friends must have done—they were so simple; and I had no objection to them if they would suit. But somehow with all their perfections I didn't easily believe in them. After all they were amateurs, and the ruling passion of my life was the detestation of the amateur. Combined with this was another perversity—an innate preference for the represented subject over the real one: the defect of the real one was so apt to be a lack of representation. (“The Real Thing” 317)

まず確認しておかなければならないのは、語り手は、“an innate preference for the

represented subject over the real one: the defect of the real one was so apt to be a lack of representation”(317) と述べて、もともと「ほんもの」よりも「“the represented subject”(表現されたもの)」の方を好むと述懐している点だ。つまり、モデルが描かれる対象として「ほんもの」ではなかった場合、それに近づけるための表現力が必要であり、語り手はその乖離を埋め合わせる表現能力に芸術的価値を見出しているということになる。そして、語り手自身が認めている通り、このような彼の価値観は少々「ひねくれ(“perversity”)」ている。

第3章では、画家のアトリエで Mrs Monarch と Miss Churm がたまたま鉢合わせする場面を、“Sometimes, however, the real thing [Mrs Monarch] and the make-believe [Miss Churm] came into contact”(329) と、ユーモラスな言い回しで描写する。ここでは、「ほんもの」に対置されるのは、“make-believe”である。そして、画家は、Monarch 夫妻を試しに使ってみたが、雑誌社から挿絵の質が改善されない場合には契約を打ち切ると警告を受けたために、結局のところ、モデルとして表現力の高い Miss Churm とイタリア人の浮浪者 Oronte を使う方針に戻す。最終章では、このような両者の関係は、“They [the Monarchs] had bowed their heads in bewilderment to the perverse and cruel law in virtue of which the real thing could be so much less precious than the unreal [Miss Churm and Oronte]”(345) と描写されている。また、別の場面で Miss Churm と Oronte をモデルに使っているところでは、彼らを“the ideal thing”(344) と評している。このように、「ほんもの」に対置される言葉は、“the represented subject”、“make-believe”、“the unreal”そして“the ideal thing”と形を変えている。一般的には、“make-believe(「みせかけ、いつわり」”や“unreal(「真実性にかける、いつわりの」)”といった言葉と“the ideal thing(「理想的なもの」)”を同列に捉えることには少々抵抗を覚えるだろう。しかしながら、“The Real Thing”において、語り手である画家にとっては、「ほんもの」の対極にあるという意味において、これらの言葉は全て等価値なのだ。そして、「私」は、最終的に「ほんもの」の紳士淑女である Monarch 夫妻を見捨てて、Oronte と Miss Churm を絵のモデルに採用する。この画家の価値観は頗る風変りなのである。

このように、語り手の画家は Monarch 夫妻を「ほんもの」であると捉える点では一貫しているのだが、最後には彼らを見捨てて、Miss Churm と Oronte を選択する。彼の選択については、2つの正反対の解釈が可能であるように思われる。1つは、Powers が“the Monarchs are used and sacrificed to the end of art”(367) [4]と指摘する通り、語り手の画家は、よりよい挿絵を描くために Monarch 夫妻を切り捨てたと見る考え方である。James は、Monarch 夫妻が置かれている経済的貧窮を適度に強調することによって、読者が彼らに対して憐憫の情を感じずにはいられないように仕向ける一方で、語り手「私」は、夫妻を切り捨てるという選択に良心が咎め、そして、彼らに対して同情を感じてはいるものの、それ以上に芸術を尊重した結果、この選択をしたと解釈できる。このように考えれば、夫妻への同情は切り捨てて、「私」は芸術を優先したという解釈になる。しかしながら、この読みは、その先にある事実を掴み損ねているようにも思われる。というのは、確かに画家は、より素

晴らしい絵を描くためにMiss Churm と Oronte を選びはしたが、その動機は挿絵の質が向上しない場合には契約を打ち切ると雑誌社から脅されたことによるからだ。感情に流されることなく肖像画の質と芸術的価値を上げることは、一見、芸術を選択したかのように見えるかもしれないのだが、彼にこの決定をさせた要因は、詰まるところ、仕事を失いたくないという金銭面における事情なのである。これは、経済的損失を回避するという現実的な選択を重視したものであり、“art vs the worlds”のうちどちらに該当するかと言えば、明らかに後者ということになるだろう。こう考えれば、「私」は経済的事情から Miss Churm と Oronte をモデルに選んだとも読める。

「序」で言及した“The Story of a Masterpiece”(1868)、“The Lesson of the Master”(1888)、及び“The Liar”(1888) 等の作品においては、そこに登場する主要人物である芸術家たちの選択が、芸術よりも現実の利益を優先していることは明らかなのだが、“The Real Thing”の場合は、Powers の解釈で議論を止めてしまえば芸術を選択したようにも見える。しかしながら、本章で指摘した通り、その選択をさせるに至った動機まで掘り下げれば、生計をたててゆくためには仕方のなかった語り手の事情が優先されたことになる。恐らく、この芸術家自身の「ほんもの」の定義が奇抜で曖昧なゆえに、――「ほんもの」それ自体の定義がなされるのではなく、その対極に位置するものが刻々と姿を変えて提示されるだけであるため――そしてさらに、art vs the worlds の二択においても、決定的な判断の根拠が得られないゆえに、読者は、まず、何が「ほんもの」なのかについて確証が得られないような仕掛けになっているのだ。[5] 同様に、語り手の画家が、芸術を選択したのか、世俗の利を優先したのかについても、ジェイムズお得意の曖昧性を残す作品に仕上がっている。

Ⅱ

前章では、従来なされてきた一般的な解釈を概観したが、“The Real Thing”を「芸術家もの」として扱わないとすれば、この短編にはどのような解釈が可能であるのだろうか。本章では、この点について議論を深めてみたい。

「序」で触れた通り、“The Real Thing”は、James の著名な「芸術家もの」が収録されている『ニューヨーク版』の第15巻・16巻には収録されなかったわけだから、小説家自身にとっては、どこかしら、この短編小説に「芸術家もの」としては納得のゆかない部分があったのだろう。或いは、当初から彼がそういう作品として執筆していないという可能性も否定はできない。

そもそも、Monarch 夫妻は、自分たちが「ほんもの」の紳士淑女なので、挿絵のモデルに採用してもらえるだろうと画家のアトリエを訪れたわけだが、この「ほんもの」を、自身の持つかなり特殊な価値観で否定しているのは、他ならぬ語り手である。しかしながら、そもそもこの語り手自身が、芸術家として「ほんもの」と呼べるに値するかどうかについて疑

問を呈する批評家も少なくない。

最も手厳しいのは Aswell で、“The real question with which James teases the reader in this story is whether the painter himself is the real thing. The painter in “The Real Thing” takes advantage of untalented and helpless people for questionable artistic purposes, but he is motivated more by vanity than malice, . . . ” (188-89)と指摘して、語り手を批判する。また、Uroff は、“The basic problem is optical. The painter−narrator, whose job is not only to see for us but to see as a profession, has certain visual deficiencies. He is himself a poseur of sorts who must make a living by doing illustrations for magazines and books while he really sees himself as a great painter of portraits” (41)と述べて、そもそも語り手が、芸術家としてこの物語を読者に伝える資質を欠いているのではないかと示唆する。「私」は、“The Story of a Masterpiece”に登場する Steven Baxter や“The Liar”の Oliver Lion のように、画家として卓抜した才能を備えた芸術家ではないのである。画家の位置づけについては、Lester も大筋で Uroff の主張に賛同しており、語り手の技量や芸術観に疑問を抱いている研究家は枚挙にいとまがない。

これらの点を踏まえると、『ニューヨーク版』において、“The Real Thing”が他の「芸術家もの」と同じ巻に収録されなかったことにも納得がゆく。“The Real Thing”が収められている第18巻の他の作品を列挙すると、“Daisy Miller”、“Pandora”、“Patagonia”、“The Marriages”、“Brooksmith”、“The Beldonald Holbein”、“The Story in It”、“Flickerbridge”、そして、“Mrs. Edwin”などで、詳論に立ち入ることは省略するが、これらの作品に共通したテーマを見つけ出すことは、ほぼ不可能であろう。著名な作品は含まれているものの、他の巻に入らなかったものを寄せ集めて纏めたような組み合わせであると言っても過言ではない。「芸術家もの」という範疇に当てはまらないとすれば、“The Real Thing”において James が描き出そうとしたものは、一体何なのであろうか。

James の『創作ノート』の記述内容に照らし合わせると、“The Real Thing”は当初の構想がかなり忠実に反映されている例であると言ってよいだろう。James は、同世代の作家 George Du Maurier から聞かされた、彼を訪れた二人組の紳士淑女の話に着想を得たと言い、それは以下のように書き留められている。

> . . . the lady and gentleman who called upon him [Du Maurier] with a word from Frith, an oldish, faded, ruined pair——he an officer in the army——who unable to turn a penny in any other way, were trying to find employment as models. I [James] was struck with the pathos, the oddity and typicalness of the situation——the little tragedy of good-looking gentlefolk, who had been all their life stupid and well-dressed, living, on a fixed income, at country-houses, watering places and clubs, like so many others of their class in England, and were now utterly unable to *do* anything, had no cleverness, no art nor craft to make

use of as a *gagne-pain* could only *show* themselves, clumsily, for the fine, clean well-groomed animals that they were, only hope to make a little money by——in this manner——just simply being. (James, *Notebooks* 55)

ここに描かれているような男女——つまり、産業革命以降、経済の仕組みが激変したことにうまく適応できず、それでいて、それまでの豪奢な暮らしぶりを変えることはできずに窮迫してゆく、貴族を始めとする有閑階級の人々——は、James が生きた時代には珍しくなかった。事実、初期の James は、没落してゆくヨーロッパの貴族とアメリカ人ミリオネアの結婚を描いた恋愛小説に、彼らの文化的な相違や対立を巧みに描きこむことで成功して、作家としての地位を確立した。

James の『創作ノート』に書かれている事柄は、はっきりとわかるほど明瞭に、常に作品に反映されるわけではない。しかしながら、“The Real Thing”の場合、読者の関心は「ほんもの」探しに集中しがちであるけれども、作家の主張は、実は非常に単純明快なのではないだろうか。すなわち、“The Real Thing”は、かつては裕福であったが、急速な時代の変化に対応してゆくことができずに沈淪してゆく人々の生き様と境遇に光をあてた作品なのではないだろうか。本稿におけるこれまでの議論の流れからすると、このような指摘は唐突に思えるかもしれない。確かに、James 文学を鳥瞰する場合に、それまでの品位ある暮らしを維持するために、表面は取り繕いながら悪戦苦闘する嘗ては有産階級であった人々を描くことが、彼の創作活動における主たるテーマであると言うことはできないだろう。しかしながら、このような人物たちが、初期から晩年の作品を通して、大作か小品であるか、或いはその作品の扱う主題とは関係なく、彼の小説の随所に登場し続けたのも事実だ。そして、このタイプの人々を最も巧みに描くことに成功した作品の一つが“The Real Thing”なのではないだろうか。

“The Real Thing”の語り手「私」が画家である設定になっているのは、単に、『創作ノート』に書き留められた物語において、実際に Du Maurier が風刺漫画家であったこと、そして、モデルの仕事を求めて一組の紳士淑女が彼の元を訪れたという事実を忠実に再現したに過ぎない。“The Real Thing”においては、Monarch 夫妻を採用するか否かの選択を、語り手の芸術における価値判断の問題にすり替えたことによって、James は、彼自身が抱いていたと思われる彼らへの憐憫の情が露骨に強調されることを巧みに回避することに成功しているように見受けられる。そのために、この短編小説が「芸術家もの」に分類されてしまい、読者の関心を「ほんもの」探しの一点に集める結果になったのではないだろうか。

James は、当時の環境では経済的に自立することができなかった女性たち、或いは、産業革命に端を発した急速な社会構造の変化についてゆくことができず、貧窮の中でもがき続ける没落貴族等に対して、かなり同情的であったと思われる。19世紀の女性が置かれていた境遇を最も端的に代弁しているのは、小説家の初期の代表作 *The Portrait of a Lady* に登場す

る Merle 夫人の“A woman perhaps can get on; a woman, it seems to me, has no natural place anywhere; wherever she finds herself she has to remain on the surface and, more or less, to crawl (James *The Portrait of a Lady*, 280)”という言葉であろう。しかしながら、凋落してゆく貧窮した貴族たちの境遇については、没落貴族と勃興する中流階級の結婚という形を取って、いわゆる「国際状況」をテーマとして扱った作品群においては前面に打ち出して描かれていてるためわかりやすいが、この形式を取らない小説においては、そもそも彼らの境遇の悲惨さを描いているのか、果たしてそれが主題となっているのかどうかさえ瞭然としない場合が多い。その点では、“The Real Thing”は比較的わかりやすい事例であるように思われる。Oronte がモデル役を務めている間に、Monarch 夫人は語り手からお茶の準備をするように求められると喜んでこれを引き受け（James, “The Real Thing” 341）、また、別の機会には、Monarch 少佐が、語り手の朝食の跡片付けをさせて欲しいと申し出ている（344-45）。実際に彼らにできることは他になく、「私」のセリフが示す通り、画家のアトリエで彼らが果たしている役割は、モデルではなく使用人の役割なのである。[6] これまで見てきた通り、この短編小説は、芸術家がモデルとして Monarch 夫妻を選ぶか、それとも Oronte と Miss Churm を選ぶかという点に関心が集まり過ぎたために、本来の主題に対して関心が向けられてこなかった作品なのではないだろうか。

“The Real Thing”は、過去の栄華にしがみつきながら、それでいて、激変する社会の現実を受け入れることができず、もがき苦しみながら生きている紳士階級の人々を描いた作品としては、秀逸な短編であると言ってよいのではないか。そして先述の通り、小説家自身は、芸術をめぐる語り手の選択に読者の関心を集中させることで、Monarch 夫妻、或いは同時代に生きた彼らのような立場におかれる人々に対して彼自身が感じていた憐憫の情を巧みに消し去ることに成功していると言えるだろう。

結　び

“The Real Thing”は、James 研究の大きな流れにおいては、「芸術家もの」の範疇に入る作品の１つとして論じられるのが一般的であるが、本稿では、没落してゆく紳士階級の人々に光をあてて論じてきた。このような人物たちは、James の作品には頻々と登場するが、彼らが個々の小説の中心的なテーマを織りなすことは殆どない。しかしながら、幾つかの中短編小説においては、彼らが置かれている悲惨な境遇をつぶさに描き出している。その代表的な短編の１つが、“The Real Thing”であると言えるのではないだろうか。

註

1．『New York 版』の第12巻に収録されているのは、“The Aspern Papers”、“The Turn of the Screw”、“The Liar”、そして“The Two Faces”である。“The Two Faces”を除く３編に共通し

ているのは、信用できない語り手（“unreliable narrator”）の起用であり、彼らは、いずれも James 文学を代表する信用できない一人称の語り手と言っても過言ではない。ここに“The Two Faces”が収録されたことについては説明することが難しそうであるが、第12巻の収録基準は極めて明瞭であるように思われる。

2．ジェイムズのいわゆる「芸術家もの」が扱う主だったテーマには、以下のようなものがある。本稿で触れた“The Real Thing”に代表される“art vs the worlds”テーマ、大衆の興味に応えて、当時のジャーナリズムが著名人――主に作家――のプライヴァシーを暴き始めたことへの非難を狙いとする主題、芸術作品を理解することができない世間への失望を中心に据えたモチーフ等が挙げられる。詳細は、拙論「Henry James の中短編小説：芸術家ものの３つのタイプ」参照。

3．“The Story of a Masterpiece”と“The Liar”においては、それぞれ、傑出した画才を誇る画家が登場するが、彼らは共にその天賦の才能を、自分を袖にした本人、或いは恋敵を卑しめるために彼らの肖像画を描くことによって、失恋の仕返しという極めて卑俗な目的に卓抜した才能を用いてしまう。“The Lesson of the Master”では、若手の気鋭作家 Paul Overt が、尊慕する小説家 Henry St. George に、若いうちは芸術に専念するべきだと助言を受け、これに従い作品を完成させるために旅にでるが、帰国すると妻を亡くした St. George が、彼の意中の女性と婚約したことを知らされるというものだ。いずれも、画家及び St. George が芸術よりも、俗世間における自分の願望――つまり、“art vs the worlds”における後者――を優先した例である。本稿で取り上げている。“The Real Thing”については、“the Monarchs are used and sacrificed to the end of art”（367）という Powers の指摘がある。これは、語り手である画家は、世俗における彼の私的な感情よりも芸術を優先したとする解釈である。但し、本論第Ｉ章で論じる通り、全く異なった読み方をすることも不可能ではないだろう。

4．As I've said, then, “The Liar” serves well enough as complement to “The Real Thing.” Lyon has made his sacrifices too; but he has sacrificed his art to personal ends, and to the meanest of personal ends at that: “His old friends *was* ashamed of her husband [Lyon triumphantly assumes], and he had made her so, and he had scored a great success even at the sacrifice of his precious labour. And if there is, as Lyon believes, any suicide involved in Capadose's slashing of the portrait, it is the vicarious (so to speak) suicide of Oliver Lyon the artist: Lyon has sacrificed the artist to the man, he has used Lyon-as-artist to satisfy the mean desire of Lyon-as-man. This, of course, is the reverse of the situation in “The Real Thing,” where the Monarchs are *used* and “sacrificed” to the end of art. But, as I have suggested above, the artist's treatment of them has somehow improved them, humanized and ennobled them: he leaves them better than they were. Lyon has left his pair somewhat worse than he found them, having drawn to the surface the evil that is latent in us all. (Powers 367)

5．Uroff は、“The story is certainly about the real thing of perception; but its point seems to be that the real thing is everywhere elusive”（46）と論文を締め括り、そもそも「ほんもの」というもの自体が捉えどころのない存在である点を指摘している。

6．“If my servants were my models, then my models might be my servants. They would sit for

ladies and gentlemen and *they* would do the work. (James, "The Real Thing" 345)

Works Consulted

Aswell, E. Duncan. "James's Treatment of Artistic Collaboration." *Criticism*. 8.2 (1966): 180-95.

Banta, Martha. "Artists, Models, Real Things, and Recognizable Types." *Studies in Literary Imagination*. 16.2. (1983): 7-34.

Gale, Robert L. "H. J.'s J. H. in 'The Real Thing.'" *Studies in Short Fiction*. 14.4 (1977): 396-98.

James, Henry. *The Complete Notebooks of Henry James*. Eds. Leon Edel and Lyall H. Powers. New York: Oxford UP, 1987.

---. *The Portrait of a Lady*. Vol. 3 of *The Novels and Tales of Henry James*. 26 vols. New York: Scribner's, 1976.

---. "The Real Thing." Vol. 18 of *The Novels and Tales of Henry James*. 26 vols. New York: Scribner's, 1971. 307-46.

Lackey, Kris. "Art and Class in "The Real Thing." *Studies in Short Fiction*. 26.2 (1989): 190-92.

Lester, Pauline. "James's Use of Comedy in 'The Real 'Thing.'" *Studies in Short Fiction*. 15.1 (1978): 33-38.

Lycette, Ronald. L. "Perceptual Touchstones for the Jamesian Artist-Hero. *Studies in Short Fiction*. 14 (1977): 55-62.

Powers, Lyall H. "Henry James and the Ethics of the Artist: "The Real Thing" and "The Liar." *Texas Studies in Literature and Language*. 3.3 (1961): 360-68.

Ron, Moshe. "The Reading of 'The Real Thing.'" *Yale French Studies*. 58 (1979): 190-212.

Smith, Virginia Llwellyn. *Henry James and the Real Thing: A Modern Reader's Guide*. London: Macmillan, 1994.

Uroff, M. D. "Perception in James's 'The Real Thing.'" *Studies in Short Fiction*. 9.1 (1972): 41-46.

Winner, Viola Hopkins. *Henry James and the Visual Arts*. Charlottesville: The UP of Virginia, 1970.

名本達也 「Henry James の"The Story of a Masterpiece"と"The Liar"：肖像画と嘘の効果」『九州アメリカ文学』43（2002）：34-44.

---.「作家とジャーナリズム；Henry James の"The Figure in the Carpet"と"The Death of the Lion"」『中四国アメリカ文学研究』37（2001）：1-11.

---.「Henry James の中短編小説：芸術家ものの３つのタイプ」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』12. 2（2008）：223-32.